



清新二中だより

本校教育目標

- 1 豊かな心で、互いに敬愛できる人（敬愛）
- 2 進んで学び、深く考える人（知性）
- 3 健康で明るく、自ら鍛える人（健康）
- 4 責任を重んじ、勤労を尊ぶ人（責任）
- 5 礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人（礼節）

田 舎

副校長 水 町 周 義

この時期になると決まって「冬休みはどこか行ったの？」と生徒に訊ねる。「家で過ごした」「旅行に行った」「初詣に行った」などの答えが返ってくるが、一昔前、圧倒的に多かったのは「おじいちゃん、おばあちゃんのところに行った」「田舎に帰った」だ。「お年玉をいくらもらった」「おじいちゃんに〇〇を買ってもらった」「遊びに連れて行ってもらった」「おいしいものいっぱい食べた」など、楽しそうに話す生徒の顔は今でも記憶に残っている。ただその報告を聴くのも年々減っているような感じがして、何かさみしさを感じる。

「田舎」の定義は皆さんがイメージしているとおおり、「都会や都市の対義語」「都心から離れた場所」「人口や家がまばら」「故郷」などである。

私事であるが、子どものころ静岡県に在住し、祖父母を含めた親族は東京に在住していた。正月になると両祖父母の家に集まり（私の家族は1月1日に両方を訪ねるという過酷な日程となっていた）、正月の雰囲気を楽しんでいた。それが通例であり、当時の私は「お年玉をもらいに行く」ことが第一の名目となっていたと記憶しているが、集まりが楽しみであったことには間違いがない。しかし一度も「田舎に帰る」という感覚をもったことがない。私の在住していた場所は、山と海と田畑に囲まれた「田舎」であったからだ。

中学生、高校生になるにつれ、「行くのが面倒くさい」と思うようになってきた。友達と遊んでいるほうが楽しい、家でゴロゴロしていたいなど、思春期によくある怠惰、反抗心などがあつたと思う。だが、結局、毎年親族の集まりには参加した。実家を出て働き始めた時、ほとんど実家にも帰らずにいた私は、さらに面倒さが増していた。それでも毎年参加した。そして現在は場所を変え、自分の家族を連れて私の母親のところに毎年集まる。母親は東京に住んでいるが、現在は「田舎に帰る」感じをもっている。「田舎＝安心できる場所・落ち着く場所」と考えるようになってきていることに、ある時気づいた。

生徒の皆さんは「田舎」をもっているのだろうか。自宅のほかに「安心できる」「落ち着く」「楽しい」と感じられるところはあるのだろうか。現在は様々な家族の形態があり、それぞれの家庭にそれぞれの事情があることは認識している。また、「田舎」と呼べる場所に住んでいる人も減少している。都市化や過疎化などが関係している。小さい頃の私のように、「田舎はない」と思っている生徒も多いのではと考えてしまう。しかしながら、年に一度や半年に一度、訪ねる場所はあるのではないか。祖父母がいて、親戚のおじさん・おばさんがいて、いとこがいて、多くの親族が集まる場所があるのではないか。ぜひその場所が、安心できる場所、落ち着く場所、楽しい場所であってほしい。大きな意味での「帰るのが楽しみな田舎」であってほしい。

今後、社会はますます変化を続け、何が起るか予想できない世の中になってくるだろう。そのような世の中に立ちむかい、生き抜く子供たちには、臨機応変で柔軟な対応が求められる。きっと社会生活の中でストレスや不安を抱えることも少なくないと思う。そのようなとき、一息つけて安心できる場所、心が落ち着く場所があり、そこに集まる人がいることを、とてもありがたく感じるであろう。明日からの活力にもなることだろう。安心できる田舎、落ち着く田舎、楽しい田舎、そんな「田舎」を大切にしてくれることを切に願う。

